

京都帝国大学から京都大学へ

戦後の混乱から新制大学の発足へ

三木良一

(昭和25年卒)

昭和22年4月我々25名は京都帝国大学理学部数学科(公式には“主として数学を専攻する者”と表現された)に入学を許可され時計台ホールでの入学式に出席した。式では鳥養総長の式辞を聞き「入学宣誓書」に署名したのを記憶している。学歌(「九重に花ぞ白える…」)を聞いたのもこれが最初である。出身は旧制高校、旧制高专、軍医系諸学校等と多岐に亘り年令にもかなり幅があった。式後、各学部・学科に分かれて受けた履修指導では(“主として…”表現にも明らかである)規制はやはりゆるく、一回生配当の「微分積分学」、「微分方程式論」、「立体解析幾何学」(これこれ演習を含む)、「物理学通論」、「力学」、「物理学実験」(以上が必修)、「天文学総論」、「数値計算法」に始まる他教室開講のものを含む開講科目については、「履修要項」の類いの文書が

残っていないので数学科(以下一応この表現を用いるが)での卒業(学士試験合格)資格については細部は定かではない。各科目ごとに掲示板に発表される(合否)成績については、各人に予め交付された「受教簿」を後日(卒業判定迄)担当教官に提出して記入して頂くという方式であった。[登録手続、というか予め受講願(?)を(口頭でにして)教官に提出したのみ記憶が定かではない。]一回生配当の数学の講義は午前中、演習は午後であり階段教室(第3講義室)で、物理学通論以下の科目<sup>は</sup>各担当教室で開講、他科との合同講義であり数学の(必須)講義には他学科の学生も出席したが、3時間の講義・演習は始めは長く感じられた。

当時上級生としては3回生が2クラス(高校を19年秋に2年半で卒業の学年と、20年春に在学2年で卒業の学年)があって我々は前者を旧3回生、後者を新3回生と区別したものである)教室の建物も現在の玄関から北のウィングがなく、南のウィングも第3講義室の所までであった。

講義でいうと、微分積分は高校でも講義され

実際入試でも課せられたのだが所詮は「計算法」に止まり、実数の連続性、極限概念の扱いはキチンとは教えられておらず、担当の岡村博先生がしばしば学生の表情を確かめつつ講義をためて「判りませぬか？」との念押しをされていたのが印象的である。それに比べると「立体解析幾何学」は高校で二次曲線の分類までやっていたので受け入れ易く、「微分方程式論」も（とくに演習では）解法に重きがおかれて抵抗がそれほどではなかった。（この吳何分にもずいぶん昔の話で記憶にも個人差が大きいかもしれない。）

ところで、最近の大学では（といっても私の在職がすでに20年程前だが）講義の登録に当て上級回生配当科目の受講に厳しい傾向にあるかに思えるが、私は不遜にも三高同級の一人と語り、岡村先生の「実変数関数論」（2回生配当）を受講した。—背景として高校での工場勤員時に森毅君をキーターとして能代先生の「集合論」（岩波講座）を輪読していたのがプラ

スになったのみも知れない。ところが(周知の如く)岡村先生が23年夏に急逝されたため、結果的に先生の最終の講義を聞くという貴重な経験をもつことになったのである。

一方日常生活の面ではさきの小文でも記した様な経済事情の下で(済英会)奨学金には応募したが採用されず、中学時代の恩師(京都府立高に移っておられた)が紹介して下さる家庭教師が支えであったが、当時学生の間で少くなつたダンスパーティを主催して資金かせぎをするほどの才覚もなく、同級生の一人と一諾に夏休みの間、徹夜のアイスキャンディー作りのアルバイトをやって息をついたのだが、生きて行く上とは云え無茶をしたものである。(頃にこの友人は胸を病んで卒業することなく亡くなった。)

この一回生の間に決して忘れないこととして昭和23年1月26日の三高自由寮の全焼がある。当時は丁度寮のすぐ東の、道一つ隔てた長屋に下宿していたが、その日は西大路七条での家庭教師を終えて東一条まで戻ると正に出

火直後で東一条の通りからは「住人」を名乗って通行を許される有様。延焼を防ぐために、バケツで水をかけるのがすぐに湯気と 雨戸になる始末で消防車による放水もガソリンの不足より中絶も止むこともなる状況の果てに寮は全焼し鎮火が宣言されたのは夜が明けてからであった。

二回生以後は演習がなくなり時間に余裕は出来たが、一方講義の方はそれだけ程度は上り、演習がない分講義に対処するための努力がはるかに大変となった。蟹谷、松本、秋月、小堀各先生の講義それぞれを理解して行くだけでも、いくらでも時間なほしく、一回生当時の様な無茶なアルバイトはさけて複数の家庭教師だけに止めることにした。

丁度この頃みらであらうか、法聖第4教室でヨーロッパ映画の上映が催される機会がふえ「パリ祭」、「パリの屋根の下」の如きトーキー初期の作品が上映されただけでなく、「悪魔は夜来る」、「美女と野獣」といった名作や「赤い靴」

「シベリヤ物語」といった始めて目にする天然色映画の輝きが驚きであり「労音」の発足など文化的な思慮も徐々にひろがって行った。

三回生になると講義は(二回生までの講義、演習の履修が順調に進んでおれば)射影幾何学特論、数論、関数特論くらいとなり、その理解のための勉強にもかなりの時間を当てられる様になるが——当時は現在の様な(表現は度々変っているが)講究、卒業研究といった集中的課題がなく——関心は卒業以降の進路に集中することになる。我々以前の様な“数学科では飯も食べぬ、”的な表現はなされぬにせよ、各人にとっては、二回生までの履修科目の合否結果と自己評価の上に立って、希望とその実現のための計画の必要性が否応なしに発生する。現在の様な課程としての大学院は存在せず、生活のための収入の獲得と、自分なりの教学に關する将来の<sup>環境</sup>確立を何としてもはたさなければならない。各人が自分なりに思案をして、信賴する先生に身のふり

ようをお話する形で卒業後の進路がおのづから定まっていこうであった。

進路選択のことについては別に、三回生の間にあった印象深い事柄を記しておこう。蟹谷先生の特論は余りにも程度が高く少しでも理解が進むようクラスで相談し、先生の講義ノートをお借りして(当時唯一の方策であったが)ガリ版にプリントしてもらって予習しようということになった。おかげで理解の進みが少しは容易になったみたいである時、私が教授室へ伺ったところ、"まだだ、まだ計算中!"というお言葉。何と先生の新しい御研究の一端をお話し頂けるということおと感動し、我々に難しかったのも当然と納得したことであった。

蟹谷先生についてはもう一件、この頃おと(数学科、理学部に限らず)講義放棄(ストライキ)が珍しくなっていたことおあり、我々も先生の講義をボイコットした。次の週先生の講義はストライキ前おらは1回分飛んだ形で

始まった。ざわめく学生を前に先生はハッキリと“僕は先週ちゃんと講義をしたなり、今日はここなり、”とおっしゃったのである。

秋月先生が「教論」の講義の際に一冊の書物を示されて「これが A. Weil の Foundation だ、日本にはこの一冊だけ！」とおっしゃった。前に小松勇作先生が「等角写像論」の巻末に、大戦末期の海外の情報獲得の困難性にふれておられたかに記憶するが、フランス政府留学生の交換船による途中帰還など戦争というものが国際的な情報交換、研究交流にどれほどの悪影響をもつものか、私共の前の世代の先輩方の御苦労がしのばれるところである。

最後に卒業時のあれこれを (~~自分だけの~~  
~~部分も含めて~~) 記しておく。上述の様に入学時に提示された卒業の必要条件が満たされると、我々の時代の最後の関門は“口頭試問”の形をとった。必要条件を充<sup>し</sup>た者は“学士試問”を受けることになる。実際には一つの会議室を試験場、教室3階にあった図書閲覧室

を控室として、四人の先生方から一人ずつ試問を受け形をとり、試問後は控室に戻ることは許されない。(研究室を与えられ<sup>る</sup>みどうみは別として) 完全に就取してしまうのではなく“院生”として<sup>遠い任地へ</sup>何らみの形で教室へ出入しゼミなどに参加できるという形をどなたかの先生に御承知頂いたものが“大学院の時分は、などと称するが授業料は不要、学割はどうだったか、各人別に待遇は少しずつ異なつたみも知れないが、とにみく何らみの形で大学院(的)生活を選択したものを除外して試問には云い伝え的に“連続”が口にされ、“大学院”を希望のどこかにのべたものは、より個別的项目を質問された。結構ひどい誤ちを口にした者もあった称だが“卒業を取り消すぞ!”的にお叱りを受けたものは一人もなく、病気等で留年止むなかつた者を除き、上の学年からの留年者を加えて土0、すなわち計25名が無事卒業となった。

最後にエピソードを一つ。卒業に当っては

先生方に感謝の意を表する謝恩会が開催されることな普通なのだが、我々のクラスは昔田山の宗忠神社の社務所を借りて、何人かぶコンロを用意し食器・材料もちよりスギヤキをしようとする計画、"そんな殺伐な所へ教授の先生方をおよびするなんて、という気持ちもあって敢えて御案内もしなかつた。後日、大学院生として正式に認められた後小堀先生にお呼びしたら"折角金一封を用意しておいたのに、宙にうくではないか!.."と笑っておっしゃった。平素怖いばかりと敬遠気味であった先生方の、また別の面を伺って嬉しかった記憶がある。小堀先生はまた別の校友会に、"あの学士試問は我々にとって恒例の楽しみなんだよ。"ともおっしゃったものである。

こうして昭和25年3月我々25名は京都大学の卒業生として巣立ったのであるが、奇しくもこの昭和25年3月<sup>末</sup>は(少くと電報にとって忘れがたい)(旧制)第三高等学校がその歴史を閉じ、高橋是清筆による校銘板が下された

時に当る。想えば“終戦の詔勅”を廃墟の中に聞いてから5年近く、この間の語りつくせぬ苦難の後に希望と共にそれぞれの路に進もうとしている我々ではあったが、朝鮮動乱が起つて、再び混乱の情勢がやっ来て来る日々はついそこまで来ていたのである。